様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３３１０７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２３２４

研究課題名（和文）17世紀イギリスにおけるピューリタン説教家による火薬陰謀事件説教研究

研究課題名（英文）A Study of the Gunpowder Plot Sermons by Puritan Preachers during England of the Seventeenth Century

研究代表者
高橋　正平（Takahashi, Shohei）

新潟国際情報大学・経営情報学部・特命研究員

研究者番号：７００７５８１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：火薬陰謀事件説教は事件直後から英国国教会説教家により行われ、それらは事件の張本人ジェズイット批判に向けられていた。私はこの研究の間にピューリタン説教家の事件説教を知った。厳密に言えばピューリタンの説教は火薬陰謀事件説教とは言えない。彼らは事件を論じず、ジェームズ一世にもほとんど言及せず、ジェズイットを糾弾していない。彼らの説教の目的は進行中の革命の成就を訴え、王党派との戦いでの勝利を祝福し、聴衆を革命へ鼓舞することであった。これは英国国教会説教家の説教とは著しく異なる説教である。ピューリタンには火薬陰謀事件は過去の事件で、彼らには革命こそが最大の関心事であり、説教は革命のための説教であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで17世紀のイギリスにおける火薬陰謀事件説教研究は行われておらず、英国国教会説教家による火薬陰謀事件説教研究は国内では初めてあった。その後のピューリタン説教家による火薬陰謀事件説教研究は国内はもちろんのこと国外でもそれほど論じられていない分野である。英国国教会説教家の火薬陰謀事件説教とピューリタン説教による火薬陰謀事件説教の比較はこれまで誰も論じたことがない研究で、その意味では学術的意義が十分にあると思われる。

研究成果の概要（英文）：The Gunpowder Plot sermons were conducted by the Anglican preachers soon after the plot. They were exclusively directed to the criticism of the Jesuits who caused the Gunpowder plot. I came to know that Puritans also preached on the plot. Strictly speaking, Puritans' sermons were not Gunpowder plot sermons. They didn't discuss the plot itself and take up James I and more than anything else they rarely blamed or denounced the Jesuits. What did they preach on, then? They appealed to the audience the achievement and victory of the on-going revolution. Their duty is to celebrate Puritans' victory over the Royalists and to encourage Puritans to the revolution. Puritans' sermons are remarkably different from Anglicans'. To Puritans the Gunpowder Plot was an event far from their age, and the urgent matter was how to win the revolution. The Gunpowder sermons are not necessary for the times. The revolution itself was their only concern, and their sermons are sermons for the revolution.

研究分野：十七世紀イギリス文学

キーワード：火薬陰謀事件説教　英国国教会説教家　ピューリタン説教家　ピューリタン革命

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究の発端は英国国教会説教家たちによる火薬陰謀事件説教である。火薬陰謀事件は 1605 年 11 月 5 日にカトリック教徒の過激派ジェズイットがジェームズ一世の殺害を計画した未遂事件であるが、事件直後のジェームズ一世の国会演説での事件批判にのっとり英国国教会説教家たちは事件日の 11 月 5 日にジェズイットを批判。糾弾する説教を行った。その説教は事件に類似した事件を聖書特に旧約聖書から選び、それを事件に適応し、聖書からもジェズイットの蛮行を批判するものであった。合わせて事件発覚に与ったジェームズ一世を神のごとく称賛し、ジェームズ一世の救出を神の慈悲によるものだと考え、ジェームズ一世の神格化を図った、ひいてはイギリスを神の「選民」と見なすようになった。事件への徹底した糾弾からジェームズ一世王朝の維持を訴え、併せてイギリス社会の秩序・安定を聴衆に訴えた説教であった。私は、この研究中にピューリタンもまた火薬陰謀事件説教を行っていることを知るに至り、両派の間にはどのような類似点、相違点があるのかの解明を試みることにした。ピューリタンは反体制派、反王権的態度を取る。長老派のように王との妥協を目指した派もあったが、ピューリタンの革命理念は新しい社会の実現、共和制の樹立である。反王権の観点から考えると、ジェズイットがジェームズ一世の殺害を計画した火薬陰謀事件はむしろピューリタンの反王権の態度と一致するところがあると思われるが、ピューリタンの火薬陰謀事件説教を読むとその期待は完全に裏切られる。ピューリタン説教家は火薬陰謀事件記念説教とは言え、事件にはほとんど言及せず、言及してもほんのわずかであり、事件の張本人ジェズイットへの糾弾もおざなり程度の糾弾であり、何よりも事件の最大の被害者となるはずのジェームズ一世に触れることはほとんどないのである。このように考えるとピューリタンの火薬陰謀事件説教はその真の意味において火薬陰謀事件説教とは言えない説教であると言うことができる。それではピューリタン説教家は火薬陰謀事件説教で何を論じたのか。この問題解明にあたったのが本研究である。単的に言うとピューリタン説教家の火薬陰謀事件説教は進行中のピューリタン革命と密接な関係にある。彼らは革命の成功のために火薬陰謀事件説教を利用しているのである。その最もいい例が 1644 年 11 月 5 日の 4 人のピューリタン説教家―ジョン・ストリクランド、ウィリアム・スパーストー、アンソニー・バージェス、チャールズ・ハール―による国会での火薬陰謀事件説教である。4 人ものピューリタンが一度に 4 回も火薬陰謀事件説教を行うのは異例であるが、彼らが説教で論じたことは議会軍と国王軍との戦いにおける議会軍の擁護である。議会軍の王党派への勝利を聴衆に訴え、革命の遂行を聴衆に訴えるのである。本研究で取り上げたピューリタン説教家には同じ特徴が見られ、彼らは英国国教会説教家のように事件の凶悪さを論じたり、神の慈悲により救出されたと考えるジェームズ一世に特に賛辞を送るわけでもない。あくまでもピューリタン説教家は革命の推進、成就、成功を火薬陰謀事件記念日を借りて述べているだけである。彼らの説教は火薬陰謀事件説教とは呼べない説教であるが、17 世紀革命期の説教は社会情勢に大きく影響された説教で、ピューリタンにとって火薬陰謀事件ははるか遠い過去の事件に過ぎなかったのである。本研究ではピューリタン説教家の火薬陰謀事件説教を取り上げ、その詳細な読みから彼らの説教の特質を解明している。

２．研究の目的

本研究は, 最初に英国国教会派の説教家達の火薬陰謀事件説教の特徴を踏まえてピューリタン説教家達の火薬陰謀事件説教を取り上げ、それらの説教の特徴を明らかにすることである。英国国教会派の説教家たちの説教はジェームズ一世擁護が彼らの責務なので、火薬陰謀事件に対する彼らの態度は徹底した反ローマ・カトリック教会である。事件の首謀者達及びその背後で彼らに影響を与えたローマ・カトリック教会への批判は敵意・憎悪で満ちた説教となっている。英国国教会派の説教家達は事件を引き起こしたローマ・カトリック教徒への批判を通してジェームズ一世王朝ひいては英国社会の安定を強く訴えている。彼らと比べるとピューリタン説教家達の火薬陰謀事件説教はローマ・カトリック教会・教徒への批判はほとんど見られず事件への批判も型どおりの批判となっている。ピューリタン説教家達は火薬陰謀事件日の11月5日に記念説教を行うのであるが、その説教は火薬陰謀事件を扱うよりも反チャールズ一世へと向けられ、革命が本格化してくると今度は彼らの説教は革命成功のためのアジ的な説教となってくる。ピューリタン説教の火薬陰謀事件説教は説教を通しての革命遂行とその成功の確約を聴衆に訴える説教となっており、英国国教会派説教家の説教内容とは大きな違いを見せている。このような視点から本研究はピューリタン説教家達による火薬陰謀事件説教を論じ、ピューリタン説教家の説教の真の意図を解明することをその目的としている。

３．研究の方法

本研究の研究方法は 17 世紀、詳しくは 1642 年から 1660 年までの革命期におけるピューリタン説教家達による火薬陰謀事件説教を取り上げ、各説教の精読からピューリタン説教家たちの火薬陰謀事件説教の特徴解明にあたるものである。本研究で扱われているピューリタン説教家は、Cornelius Burges, John Strickland, William Spurstowe, Anthony Burgess, Charles Herle, Mathew Newcomen, William Strong, William Bridge である。彼らの火薬陰謀事件説教を詳細に検討することによってピューリタン説教達の火薬陰謀事件説教がいかなる説教であるかが解明され、併せて英国国教会説教家による火薬陰謀事件説教との相違もまた明らかにされる。研

究方法は極めてオーソドックスな方法で、一次資料として各説教家の説教を取り上げ、それらを読み、その目指すところを究明するものである。一次資料を正しく読むことによってピューリタン説教家の説教の特徴や説教を生み出した時代背景、社会情勢が鮮明になり、革命に対するピューリタンの態度もまた明らかになる研究方法である。

４．研究成果

（2015年度）平成27年度の研究では，研究課題に入る前に最初に英国国教会派の説教家たちの火薬陰謀事件説教を取り上げ、それらの説教の特徴を明らかにした。英国国教会派説教家たちの説教の目的はジェームズ一世賛美、体制擁護なので、火薬陰謀事件に対する彼らの態度は徹底した反ローマ・カトリック教会である。事件の首謀者たち及びローマ・カトリック教会への批判・糾弾は敵意・憎悪で満ちている。英国国教会派説教家たちは事件を引き起こしたローマ・カトリック教徒への批判を通してジェームズ一世王朝ひいては英国社会の安定を強く訴えている。彼らと比べるとピューリタン説教家たちの火薬陰謀事件説教はローマ・カトリック教会・教徒への批判は見られるが事件への批判は型どおりの批判となっている。ピューリタン説教家達は火薬陰謀事件日の11月5日に記念説教を行うのであるが、その説教は徐々に反チャールズ一世へと移り、革命が本格化してくると今度は革命遂行のためのアジ的な説教となってくる。当該年度の研究対象のピューリタン説教家の火薬陰謀事件説教は説教を通しての革命遂行とその成功の確約を聴衆に訴える説教であり、英国国教会派説教家の説教内容とは大きな違いを見せている。

（2016年度）平成28年度の研究対象は平成27年度の英国国教会派説教を踏まえてピューリタン説教家による火薬陰謀事件説教である。17世紀に入り1642年に本格的に内乱が勃発し、チャールズ一世派説教家は徐々に守勢に追いやられ、逆にピューリタンが政治の主導権を握る。それと同時に説教もピューリタン説教家が大勢を占め、彼らが事件日の11月5日にほぼ毎年記念説教を行うことになった。火薬陰謀事件は元々ローマ・カトリック教の過激派ジェズイットがジェームズ一世を国会議事堂爆破によって殺害しようとした事件であった。英国国教会説教家の火薬陰謀事件説教の目的は事件の風化を防ぎ、あわせて事件の残虐性を指摘し、カトリック教会がいかに危険な組織体であるかを国民に訴えることであった。彼らは奇跡的に難を逃れたジェームズ一世を賞賛し、神への感謝をささげることに専念した。平成27年度で扱った英国国教会派説教家はすべてこの目的に沿って説教を行い、ジェームズ一世体制維持に尽力する。これに対してピューリタン説教家による火薬陰謀事件は英国国教会派説教による火薬陰謀事件と大きな違いを見せる。それはピューリタン説教家はもはやジェームズ一世賞賛、体制維持に説教を向けることはしていないということである。新しい社会の樹立、共和制国家の建設を目指すピューリタンにとってこれは当然すぎることである。彼らの説教の真の目的はいかにしてチャールズ一世体制を打倒し、新しい国家を建設することにある。本来の火薬陰謀事件日における記念説教は火薬陰謀事件を扱うことになっているのであるが、ピューリタン説教家は本格的に火薬陰謀事件を扱うことはせず、逆に体制打破を叫ぶのである。火薬陰謀事件説教が内乱時においてはジェームズ一世時代と大きく異なっていることを解明できた。

（2017年度）火薬陰謀事件は1605年11月5日国会開会中にカトリック教の過激派ジェズイットによるジェームズ一世暗殺未遂事件である。従来火薬陰謀事件説教は英国国教会派の説教家によって事件後毎年11月5日に行われていた。英国国教会派説教家による火薬陰謀事件説教については本研究の前に科研費による研究として行ったがその研究過程で私はピューリタン説教家も火薬陰謀事件説教を行っていることを知るに至った。1640年代からピューリタン説教家も11月5日に記念説教を行うことになった。しかし、ピューリタン説教家は英国国教会派説教家とは著しい違いを見せる。英国国教会派説教はジェームズ一世体制擁護のために王賞賛、カトリック教批判に集中する。これに対してピューリタン説教家は新しい社会建設が彼らの目的であるためジェームズ一世及び息子チャールズ一世を批判する。一見するとジェズイットは王権打破を叫び、それは共和制樹立を目指すピューリタンと一致するように思われるが、ジェズイットの背後にいるローマ・カトリック教会は王政的な権力をふるい、ピューリタンとは相いれないところがあった。ピューリタンにはもはやチャールズ一世賞賛、チャールズ一世体制維持の姿勢は見られない。彼らにとって時の王チャールズ一世打倒による共和国樹立が急務となるが父ジェームズ一世時に生じた火薬陰謀事件を賞賛することもない。ピューリタン説教家の説教は事件よりもチャールズ一世体制打破を直接論ずるものである。たとえば彼らは王党派との各地での戦いでの勝利を聴衆に確約し、また勝利をおさめればその記念に戦勝記念説教をも行う。

　本年度は英国国教会派説教家 William Barlowe, Lancelot Andrewes, John Donne等から始め、その後ピューリタン説教家による説教へと転じ，Cornerius Burges,John Strickland,William Spurstowe, Mathew Newcomen等の火薬陰謀事件説教を論ずることによって両派の相違、ピューリタン説教家による火薬陰謀事件説教の真の目的の解明にあたった。

（2018年度）本研究で扱う期間をピューリタン革命前後から王政復古に至るまでとし、ピューリタン説教家の事件に関する説教を取り上げることにした。英国国教会説教の火薬陰謀事件説教とピューリタン説教家の火薬陰謀事件説教の大きな違いは前者においては説教はジェームズ一世体制維持のためであり、後者においては説教は進行中のピューリタン革命成就のためであることである。それゆえ、ピューリタンの説教にはジェームズ一世賞賛は見られず、火薬陰謀事件よりもチャールズ一世打倒を目的とした説教となっている。最終年度においてはMatthew Newcomen,Wlliam Strong, William Bridgeを研究対象としたが、いずれの説教においてもジェー

ムズ一世は登場せず、事件そのものも論じられていない。Newcomenではジェズイットの「狡猾」と「残虐性」が強調され、Strongではむしろ王党派との戦いへの勝利が扱われ、Bridgeではイギリス社会改革の必要性が説かれている。王政復古までのピューリタンの火薬陰謀事件説教をほぼ網羅した本研究は英国国教会説教の火薬陰謀事件説教研究の続編とも言うべく研究であるが、ピューリタン説教による火薬陰謀事件説教が何を意図していたかが明らかにされた。

本研究の成果は以下の５にも明らかなように、論文と図書（研究書）がある。研究の集大成は『火薬陰謀事件とピューリタン』である。

５．主な発表論文等

①「*Mariana de Rege. l. I. c.7.* ―マリアナは「王殺し」論者か―」、十七世紀英文学会、査読有、XVII 巻、2015 、 87－109

②「William Barlow の二編の火薬陰謀事件説教」,新潟大学大学院現代社会文化研究科 『欧米の言語・社会・文化』、査読無、22 号、2016、1-45.

③「Deliverances *past* are the *pledges* of *future deliverance*」, 新潟大学言語文化研究、査読無、21 号、2016、55-86.

④「”the Repairers of the breaches” とピューリタン―スティーヴン・マーシャルの断食説教―」,十七世紀英文学会、査読有、XVIII 巻、2017 、 215－240

⑤「ウィリアム・スパーストーとウィリアム・ストロングの火薬陰謀事件」、新潟大学言語文化研究、査読無、22 号、2018、33-70.

⑥「*Meroz Cursed* と「士師記」5 章 23 節―Stephen Marshall は”Incendiary”か―」、新潟大学大学院現代社会文化研究科 『欧米の言語・社会・文化』、査読無、24 号、2018、11-38.

⑦「ピューリタンの火薬陰謀事件―ウィリアム・ブリッジの説教の目的は火薬陰謀事件か―」、新潟大学大学院現代社会文化研究科 『欧米の言語・社会・文化』、査読無、25 号、2019、39-67.

〔雑誌論文〕（計 10 件）

① 「*Mariana de Rege. l. I. c.7.* ―マリアナは「王殺し」論者か―」、十七世紀英文学会、査読 有、XVII 巻、2015 、 87-109

② 2015 年 8 月「ロマン派以前の形而上詩批判」、新潟大学言語文化研究、査読無、 第二十号、2015, 43-60

③ 「William Barlow の二編の火薬陰謀事件説教」,新潟大学大学院現代社会文化研究科『欧 米の言語・社会・文化』、査読無、22 号、2016、1-45.

④ 「サミュエル・ジョンソンと形而上詩―「不調和の調和」はウィット批判か―「東北ロマン派学会」査読有、第 3 号、2016、35-47.

⑤ 「Deliverances past are the pledges of future deliverance」, 新潟大学言語文化研究、査読無、21 号、2016、55-86.

⑥ 「ロマン派以前の形而上詩人批判―「ウイット」批判と賞賛」新潟大学大学院現代社会文化研究科『欧米の言語・社会・文化』、査読無、第 23 号、2017、43-68.

⑦ 「”the Repairers of the breaches” とピューリタン―スティーヴン・マーシャルの断食説教 ―」,十七世紀英文学会、査読有、XVIII 巻、2017 、 215－240

⑧ 「ウィリアム・スパーストーとウィリアム・ストロングの火薬陰謀事件」、新潟大学言語文化 研究、査読無、22 号、2018、33-70

⑨ .「Meroz Cursed と「士師記」5 章 23 節―Stephen Marshall は”Incendiary”か―」、新潟大 学大学院現代社会文化研究科 『欧米の言語・社会・文化』、査読無、24 号、2018、11-38.

⑩ 「ピューリタンの火薬陰謀事件―ウィリアム・ブリッジの説教の目的は火薬陰謀事件か―」、 新潟大学大学院現代社会文化研究科 『欧米の言語・社会・文化』、査読無、25 号、2019、39-67.

〔学会発表〕（計 2 件）

① 「形而上詩とロマン派詩人」

② *Meroz Cursed* と「士師記」5 章 23 章―Stephen Marshall は "Incendiary" か―

〔図書〕（計 2 件）

① 三恵社、『ジョン・ダン研究』、2017、216

② 三恵社、『火薬陰謀事件とピューリタン』、2019、222

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。